視覚部の「学生による授業評価」：平成７年度から12年度

筑波技術短期大学視覚部授業評価WG
加藤　宏　大武信之　川合秀雄　伊藤隆造

要旨：平成７年度から12年度における視覚部の「学生による授業評価」を概観した。実施率は減少傾向にあるが、年度による評価点の変化はなく、評価項目別の得点プロフィールも一定していた。学科間の差異も顕著ではなかった。また、11年度からは自由記述法を併用することによって、授業改善への具体的指摘も多く得られた。今後は、結果の公開と評価をどのように授業改善に活かしていくかが課題となるであろう。

キーワード：学生による授業評価、教授法、ＦＤ、情報公開

１．はじめに

大綱化以降多くの大学で導入された授業評価にも、形骸化が指摘されはじめ、再点検の流れが出てきている[3]。視覚部では「学生による授業評価」について実施率データを中心にこれまでもテクノレポート等で報告してきた［1,2］。しかし、評価結果については各教官が自身への評価と全体平均を知らされるのみで公開制は取っていなかった。このような状況の中、視覚部授業評価WGでは昨年、ＦＤとしてこれまでの結果の一部を公表した。本論では平成７年の試行的導入から現在までの変遷を振り返り、ＦＤで公表した結果に加え、自由記述などについても報告するものである。

２．これまでの経過

視覚部における「学生による授業評価」は平成６年度の導入検討開始以来、平成７～９年度の３ヶ年実施、休止期間としての10年度、調査票を改訂しての11年度末の実施、さらに12年度からは毎学期実施という経過を辿ってきた。この間に、企画検討や実施にあたる部局も教務委員会、授業評価WGと変遷した。評価の観点は表１の通りであり、当初より変わっていない。質問票に関しては７年度版をもとに９年度と11年度に質問項目の見直しと若干の改訂が行われたが、基本的に大きな変更はなかった（９年度以前使用の質問票は文献［1］、11・12年度使用のものについては資料１参照）。

表１　質問票の評価観点

（１）授業の障害補償への配慮
（２）職業技術教育への達成度
（３）学問や研究に対する動機付けの確認
（４）学生の授業参加への自己評価、授業の満足度・要望

11年度の大きな動きとしては、授業評価の実施担当部局として授業評価WGという組織が視覚部運営委員会の下に作られたことである。これは従来、授業評価が点検評価委員会の業務か教務委員会の業務か論議されてきたことを鑑み、独立したWGとしたものである。12年度には、視覚部運営委員会と授業評価WG、視覚部教官、事務部との授業評価における職務分担は資料２のように整理された。

また、授業評価の結果の取り扱いについては、導入時から教官会議等で論議すると同時に、教官および学生へのアンケート調査なども数回行われてきた。そして、現在視覚部では、13年１月の視覚部教官会議の合議を受け、授業評価WGを中心に13年度に向けて、評価の観点まで踏み込んだ質問票の改訂と結果の情報公開をどのような形で行うかを検討中である。

３．実施率

４年間の実施率の推移は図１の通りである。10年度は調査を実施しなかった。７年度の実施は各教官の判断にまかされ、８年度以降は各自最低１科目以上実施することを申し合わせた。８年度に実施率は上昇したが、その後はむしろ低調傾向にある。なお、この実施率は当該学期の開設授業科目数に対する評価実施科目数により算出された。よって、視覚部教官のうち何パーセントの教官が実際に授業評価の洗礼を受けたかを示すものではない。実施率の伸び悩みは、学生側ののべ回答者数の推移にも見て取れる（図２）。12年度については１・２学期にも授業評価を行ったので、途中集計ではあるが実績を示した。これは学期集中で終了する科目を担当する教官も授業評価を行いたいという要望があったことと、通年科目でも年度途中に評価を受けることにより、当該年度内に授業の改善ができるという主旨で導入されたものである。毎学期実施を導入した12年度の実績が低いようであるが、これは各学期の終了時に授業評価を行うとい

うことが年度当初には視覚部教官会議等で十分論議されていなかったことも原因の一要因となったと考えられる。このため、教官の意識が低かったこと、また、おもに学期集中で終了する授業を担当する教官が行い、通年科目を担当している教官は実施を見送ったということも考えられよう。

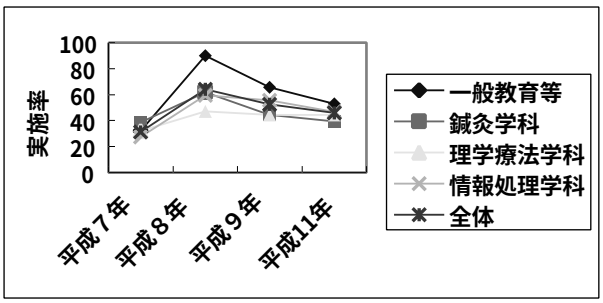

図１．　授業評価の実施率の推移

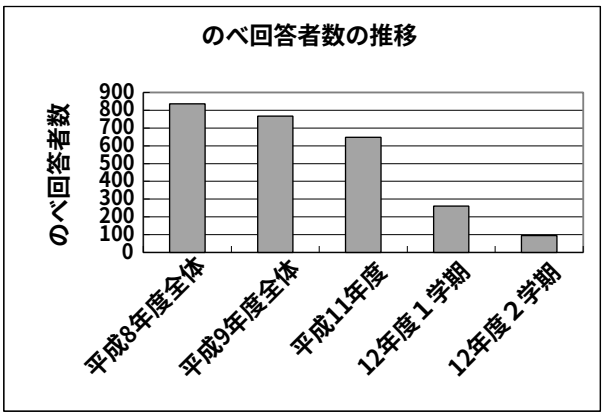

図２．　回答学生数でみた授業評価実施実績

実施率が高まらない要因には、マンネリ化も考えられるであろうが、結果を各教官個人が受け取るのみで、公表されないという実施方法にも原因があるのではないだろうか。比較すべきデータがないので他の教官はどの程度実施し、またどのような評価を受けているのかも分からず、個々の教官の自己満足（あるいは自己批判）に終わってしまい、結局実施への意欲も失うという構図が考えられる。実施率を上げることが決して目的ではないが、より多くの情報がフィードバックされれば、学生からの評価を授業改善に活かすような教官側の取り組みも促進されるのではないだろうか。

４．評定点について

質問項目別平均評価点の平成８・９・11年度の推移を図３に示す。この間、調査票は質問項目が17から15に減少されたほか、表現の変更等も受けている。そこで、グラフでは、同様の内容を聞いていると考えられる質問項目間の平均値をとるなどの調整を年度間で行った上で、項目別得点の年度による推移を示した。学生は各質問に対して１～５の５段階で評定した。５が最も高い評価で、反対に１は低い評価を表す。３は普通である。

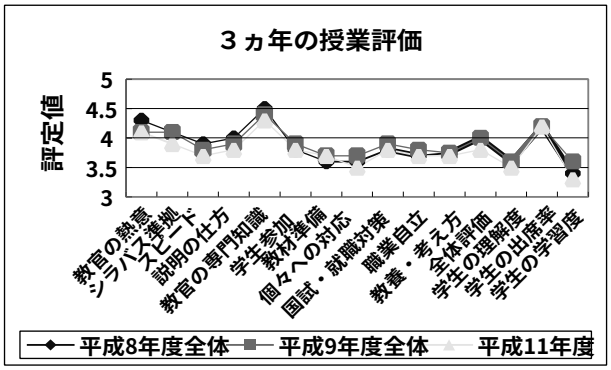

図３．　質問項目別評定値の年度推移

グラフを一見して分かるように、３ヶ年で評価点の得点パタンはほとんど変わっていない。この傾向は12年度も１・２学期の結果を見る限り変化はない。評価の高い質問項目は「教官の専門知識」、「教官の熱意」、「学生の出席率」である。逆に「学生の学習度（自分でどれだけ学習したか）」、「学生の理解度」、「学生への個別対応」、「教材準備」などの項目では評価が低かった。

評価点のプロフィールが毎年同じになるということは何を意味するのであろうか。端的にいえば、評価活動を行うことが、次年度の授業の取り組みに影響を与えていないということである。教官は評価を受けても、授業を変えなかったのであろうか。

あるいは、使用している質問票の構造的問題点ということも考えられるかもしれない。つまり、この質問票を視覚部で使用している限り、得点パタンは大きく変わらないというようなことも考えられるのではないだろうか。障害者教育、職業教育、小人数クラス、入学者の多様な学力といった本学の教育環境の構造が抱えている特質が背景にあることも考えられよう。毎年異なった学生が評価していることを考えると、現在の質問票を使用する限り、全体的傾向はこれからも変わらないのではないか。これからも授業評価を続けて行くのなら、かすかな改善をもあぶり出せるような質問票に改訂する必要があるのかもしれない。

次に学科等別の得点プロフィールを見てみる（図４）。ここではいくつかの質問項目において、一般教育等関連の授業の評価だけが異質であることがわかる。「国家試験・就職対策」、「職業自立への効果」などの項目で評価が低くなるのは、教科の性格上いたしかたないが、「教養・学問の考え方」の項目でも、評価が低い傾向にある。

一般教育関係の科目は、確かに職業に直結するものではない。また、人文・自然・社会の分野からのさまざまな教科、さらには語学・体育を含み、多様な教養を涵養するという目的がある。学生にはその意義が理解されにくいのではないだろうか。

国際基督教大学は学部の授業のほとんどを教養教育に充てているという特異な大学である。ここでも在学生の教養教育に対する評価は必ずしも高くはない。しかし、卒業生におこなった、「学生時代にもっと何を学んでおくべきであったか」というアンケートで高い評価を受けたのもまた教養的科目であったという指摘がある［5］。本学の卒業生の評価も聞きたいものである。

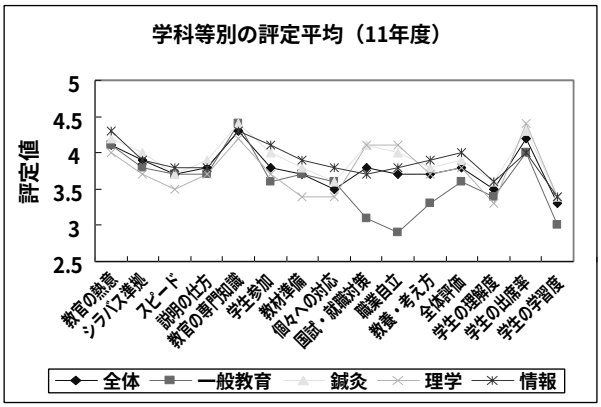

図４．　授業開設学科別に見た評定値

５．自由記述

11年度からは、授業について「良かったと思う点」、「改善した方がよいと思った点」を学生に自由記述形式で求めた。これは８・９年の質問紙でも含まれていた記述項目があまり利用されていなかったこと、評定点だけの評価では評価を受けた教員に具体的な改善の方法がわかりにくかったという点を考慮して取り入れられたものである。以下に代表的な意見をあげてみる。この自由記述は12年４月の授業評価に関するＦＤでは、ほとんど触れられることはなく、その後、視覚部教官会議において、視覚部長から口頭でその一部が紹介されたのみである。ここでは代表的なコメントを紹介する。

「良かったと思う点」
・いろいろな実験をするので楽しく学べた
・いろんな補償機器にふれられる
・例をあげて説明していたため、分かりやすかった
・どのようにすれば、学生が出来るか、教官がきちんと考えている
・はじめて視覚障害者のスポーツを体験できたこと
・ひとりひとり丁寧に教えてもらえる
・テキストファイルの提供はよかった
・概念的な内容の授業であったが、具体例などをあげて説明していたのでわかりやすかった
・技術が進歩したときの喜びを感じられた点
・黒板に書いた文字を口に出してくれる
・始めに先週の復習をしてくれたのがよかった
・授業以外にもためになる話をしてくれた
・配布資料をネットワーク上からいつでもとれること

「改善した方がよいと思った点」
（１）教材関係
・授業で取り上げている本は複数部図書館に備えて欲しい
（２）教員
・教官が授業に遅れたり、延長したり時間にルーズな場合がある
・チームティーチングの先生同士はちゃんと連携して授業してほしい
・教官の言葉遣いが不適切
・教官の説明がうまくない
・教官の知識不足
・教官の個人的な態度等に関すること
・教官の熱意が感じられない
（３）授業内容
・内容が難しい
・もっと課題を出して欲しい
・社会的に話題になっていることなども取り上げて欲しい
・もっと実習を取り入れて欲しい
・もう少し深く学習したかった
（４）授業方法
・説明が分かりにくい
・しゃべるスピードや言い回しなどことば使いに関すること
・発言を求めるなど、もう少し授業に学生を参加させてほしい
・プリントがわかりにくい
・教科書の場所をはっきり言ってから説明して欲しい
・語尾をはっきり言ってほしい
・授業で英語ばかり使わないで欲しい
（５）障害への配慮
・全盲の学生への配慮をもっとして欲しい
・板書する場合は、書いた内容を必ずことばで説明して欲しい

・弱視の置かれている現状への認識不足がある
・ 触図をもっと使って欲しい
・ マイクを使ってほしい
・音声だけでは限界がある
（6）成績評価
・テストが難しい
・教科書に書いてないことをテストに出さないでほしい
・テストの評価基準を明確にして欲しい
・口頭試問、実技試験の評価基準を明確にして欲しい

まとめと展望（授業評価は何のために）

視覚部での授業評価を導入時から総括した。その結果、実施率はむしろ上昇せず、評価点にいたっては、ほとんど変化していないことが分かった。これは授業評価が授業改善に役立っていないことを意味する。この事情は他大学においても同様であるらしい。多くの大学も多大な労力を払って実施したその結果を公表すらできず、まるで思考停止してしまったかのようである〔3〕。実施した以上、有効利用を積極的に考えるべきではないだろうか。視覚部授業評価WGでは平成12年４月に、授業評価結果についてのFDを行った。これは、現在各教官には全体平均以外は各自の授業の評価点しか知らされていないことを考えると独断専行の試みであったかもしれない。一方、視覚部においては2001年１月の教官会議において13年度より授業評価を情報公開していくことが承認され、現在その方法等が検討されている。結果が公表されるようになれば、学生の評価する眼も変わってくるのではないだろうか。

ところで、授業評価によって視覚部ですばらしい講義が繰り広げられるようになったとしたら、そこで授業改善の終着であろうか。視覚部でのかなりの授業は実習や演習であるが、それでも過半数の授業は、いわゆる講義形式である。実は、「講義」という形式は授業中に話された情報のもっとも定着率の悪い教授方法であるといわれている［4］。この考え方によれば講義で話された情報のうち、記憶に定着するのはわずか５％にすぎない。リーディングス中心の授業では10％で、視聴覚教材を活用した場合でも20％である。一方、討論形式などの参加型、実習型ほど定着率がよくなり、最大の効果をあげる方式は学生自ら他人に教えることだという。この場合の知識定着率は実に90％とされる（アメリカNational Training LaboratoriesのTheLearning Pyramidより）。

この説では情報定着率の定量化の方法は明確にはされていないが、通常の講義を行う限り、講義の中での改善をいくら推し進めたところで、情報伝達の観点からは多くを期待できないということを示唆している。日本でも、情報リテラシィ科目などを中心に、上級生に下級生の実習補助をさせるような試みをしている大学もある。実はこの方式は、教員にとっては授業補助を受けられるという特典があるだけでなく、上級生・下級生のためにももっとも学習成果を期待できる授業形態といえよう。

効率よい授業を行うためには、授業評価を教員・学生に積極的にフィードバックし、授業改善のために活かしてもらうことが重要である。同時に、講義は学生参加型の授業形式とし、さらに上級生には新入生の授業補助を行うことにより単位を出すというようなカリキュラム構成全体の改革も視野に入れた取り組みも必要となってくるのではないだろうか。

参考文献

１） 森山朝正・宮川正弘・小池勝明・加藤　宏・大武信之：平成７年度視覚部における学生の授業評価実施報告：筑波技術短期大学テクノレポート、４号、15-20、(1997)
２）伊奈論・形井秀一・川合秀雄・青木和子・石田久之・森山朝正・小池勝明・加藤　宏・大武信之：平成８・９年度視覚部の学生による授業評価実施報告、筑波技術短期大学テクノレポート、６号、91-102、(1999)
３） 駿台教育研究所・（株）進研アド：「授業評価に関する実態調査」、Between, No.154, 58, (1999)
４） お茶の水女子大学ＦＤ推進のためのワーキング・グループ：「ＦＤ講演会報告書」(2000)
５） 教養教育カリキュラム研究開発協力者会議：「報告書『新たな教養教育の創出をめざして』―大学における教養教育の現状と将来―」(2000)

資料1

平成１２年度学生による授業評価に関する調査票

この調査は、本学視覚部で行われている授業に対して学生からの評価を聞くためのものです。教育を受ける側からの率直な意見を書いてください。今後の教育をより効果的かつ魅力あるものにしていくための参考にしたいと思います。

なお、この授業評価の結果が、あなたの成績に影響することは一切ありません。また、調査票の回収は授業担当教官以外の教官が行い、集計は学外者によって行われます。　以下の各質問項目に対して、最もあてはまると思う評価を数字で別紙回答用紙に記入してください。

各数字は、各質問項目に対して、それぞれ次の評価をさしています。

5（強くそう思う）　4（ややそう思う）3（どちらともいえない） 2（あまりそうは思わない）　1（まったくそうは思わない）

〔質問項目〕

1．授業に対する教官の熱意が感じられた。
2．授業の内容は授業概要に従って進められていた。
3．授業の進め方のスピードは適切であった。
4．教官は学生によく理解できるように説明した。
5．教官はこの教科の内容について十分な知識を持っていると感じられた。
6．教官は質問や討議などへの学生の参加を十分にうながした。
7．教官は授業や教材の工夫・準備において障害補償に積極的に取り組んでいた。
8．教官は個々の学生の学習進度に対応した指導を行っていた。
9．この授業の内容は各種資格試験・就職試験等に役立つものであった。
10．この授業によって職業自立に必要な専門知識が身についた。
11．この授業によって学問の基礎的方法論・考え方や教養が身についた。
12．全体としてみて、この授業は有意義であった。

次にあなた自身のこの授業への取り組みについてお聞きします。

13．わたしはこの授業の内容を十分に理解した。
14．あなたはこの授業にどの程度出席しましたか。
　5　毎回必ず出席した。　4　ほとんど出席した。　3　だいたい出席した。
　2　あまり出席しなかった。1　ほとんど出席しなかった。
15．わたしはこの授業のためによく学習した。
16．この授業について良いと思った点について、１点以上、４点以下箇条書きであげてください。
17．この授業について改善すべきと思う点について、１点以上、４点以下箇条書きであげてください。

資料2

平成12年度 学生による授業評価実施の手順

（参考）

Student Evaluation of Lectures in the Division for the Visually Impaired-1955 to 2000

Hiroshi KATOH [1], Nobuyuki OHTAKE [2], Hideo KAWAI [3] & Ryuzo ITO [4]

[1] Department of General Education, Tsukuba College of Technology

[2] Research Center on Educational Media, Division for the Visually Impaired, Tsukuba College of Technology

[3] Department of Physical Therapy, Tsukuba College of Technology

[4] Department of Acupuncture/Moxibustion, Tsukuba College of Technology

Abstract: Student evaluations of lectures in the Division for the Visually Impaired from 1955 to 2000 were reviewed. The percentage of classes evaluated has tended to decrease from the introduction of this rating system. Average scores for items are stable year by year, and the profile of scores for each of the questions does not vary between departments. From students' free comments about the lectures, a new evaluating system which we introduced from the last academic year, we could get many ideas for the improvement of lectures. Finally, we discussed how to disclose these results and use them for faculty development.

Key Words: Student evaluation of lectures, Teaching methods, Faculty development, Disclosure